

國主義各國の軍備拡充の競争等々の事實及び印度、支那、小アジア諸國に於ける民族解放運動の尖鋭化の傾向等は、何れも今日の世界資本主義の一時期的安定の本質を曝露するものである。

二、帝國主義我が日本の諸情勢

世界資本主義の一環をなす帝國主義日本も急速なる歩調を以て一時期的安定線上を歩みつゝある。歐洲大戰により一躍世界資本主義列強の一列に加はり、過ぐる金融恐慌を始め幾多の混乱期を通じて資本主義の発展と企業の日進を遂行し、着々として金融資本の支配を確立し、巧妙なるシヨアシは、今日田中内閣に代る自由主義の粉飾に巧みなる美濃口内閣を以てした。前者の先暴なる反動政策に代る大社会政策、美濃口による無産大衆の購取と懐柔を加味し、軍縮と對支非干涉に平衡の愛を注ぐることを経、漢口内閣こそは、まさに産業合理化を最も急務と爲し、遂行するたため、ルシヨアシの技術師に他ならぬ。見よ、彼等の産業合理化の進行は、凡ゆる職場に於ける必然的な労働大衆の生活増進の爲め、競争を激せしめ、労働争議は今まさに未曾有の数の職場に蔓延し、初化を如實に示し、あるべきに在り、労働組合の組織も、労働者の意識も、産業と職場に於ける熟練労働者の組織、切手及び婦人労働者の組織、前年の増進、労働時間の強制的延長、賃銀の實質的低下、二城の武人

量解産等の一聯の犠牲も無産階級に強要することを意味する。加之彼等は、今や産業の合理化の最終の仕上げとも目すべき緊急政策——金解禁準備の遂行により、未曾有の失業苦と窮乏を労働階級に強要し、最も直線的に金融資本眼に奉仕せんとしつゝある。帝國主義的日本のルシヨアシは、今や最も集中的にして統一ある意識の攻勢を以て労働階級に挑戦し來つた。温情主義と協調主義は嘗つては日本ルシヨアシの尊貴特許權であり、封建的日本の美風の一つであつた。歴史の必然性は、や日本ルシヨアシ自身をしてこの權利と美風を放棄せしめつゝある。

三、労働階級當面の使命

かゝる客觀的情勢の急速なる推移の裡に立つ我國労働階級の陣營を觀みるに、その自覚と團結の進歩は尚ほ遅々たるものがある。帝國主義日本に於ける急激なる発展によつて生産された莫大なる數に上る労働階級の組織労働者は、僅々七分に過ぎず、帝國主義諸國中の最後、組織率を示してある。更にニ九等の組織労働者は約三十四の聯合同盟体と約三百個の單一團體に分屬し、半數は協調組合又は労働官僚の指導に属し、其餘の階級的大衆総合大工場と主要産業に鞏固なる基礎を置くものは極めて少数である。思ふに、かゝる労働階級陣營の分立と無力化の傾向は、帝國主義日本の變則的發展によるものである。同時に後進社会運動國の増進として幾多の指導精神の対立抗争、支配階級の分裂政策及び労働大衆